



巻頭言

消費者との対話

「がぶっと」「おいしく」「いきいきと」

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
デュボン株式会社 常務取締役
(農薬工業会副会長, 広報委員長)

山口利隆

一般消費者の食の安全に対する関心は益々高いものとなっている。BSE や食品の表示問題等一時期新聞紙上ににぎわしたが、農薬は依然として消費者にとって食の安全・安心に関する重要な要素の一つである。今年の1月に開催された「日本食品フェア」の参加者のうち792名にアンケートに答えて頂いたが、農薬と聞いて浮かべるイメージは「残留農薬」43%、「身体に悪い」33%、「環境汚染」22%、の順であった。

このような中で、農薬工業会が初めて直接首都圏の消費者に対して農薬ゼミナールへの参加を呼びかけたところ1,281名の応募があった。会場の都合で297名の参加者に対して4月5日に大手町のサンケイプラザで開催した。

北野大氏が農薬ゼミ塾長として家庭菜園の切り口から農薬の話題への導入を行い、本山直樹氏が「農薬の基本知識、役割及び環境への影響について」、真板敬三氏が「農薬の安全性について」、青木東洋氏が「生産者の立場から農薬について」、それぞれ講演し、雲野右子氏の司会で参加者との対話が進められた。講演内容は一般の人にわかりやすいように説明され、合間にケーシー高峰氏による笑いのトークが入ったこともあり、参加者は講演に熱心に耳を傾けて

頂き、真剣な質問や意見が多く出された。

参加者に対してゼミ聴講前と聴講後それぞれにアンケートを行った。その結果、農薬の必要性に肯定的な人はゼミ前60%からゼミ後89%へと、また、農薬を安全と思う人はゼミ前18パーセントから、ゼミ後は75%へと拡大した。農薬が使用されることについて、ゼミ前には90%の人が抵抗感ありとしていたが、ゼミ後は51%へと減少した。このように、農薬工業会主催による消費者への初めての直接対話としては、いずれの項目についても消費者の理解を得ることができ、今後このような対話を続けるための基礎を得たと考える。

このような消費者への対話を通じ、消費者から農薬に対する安心を得て、生産者が「農薬を使用すること」および「農薬の使用された農産物」に対して自信と誇りを持てるようになることを期待している。消費者から国産農産物に対する高い信頼を得、ひいては日本農業の安定と活性化の一助になることを願う。「がぶっと」、「おいしく」、「いきいきと」をイメージテーマとして消費者との対話を、今後は関係機関・団体との共催の形で、さらに発展させたい。次回の農薬ゼミは今年11月に計画している。